

被爆 76 周年原水爆禁止世界大会・広島大会 開会行事

8月5日、広島市内の県民文化センターで、被爆76周年原水爆禁止世界大会・広島大会が始まりました。広島大会は、新型コロナウイルス感染症が全国的に感染拡大したことをうけ、急遽無観客の集会へと変更となりました。

開会行事では、はじめに大会共同実行委員長の金子哲夫さんが挨拶に立ちました。今年の大会は、福島原発事故から10周年目の節目であり、今も被害が続いていること。また今年1月に核兵器禁止条約が発効し、核兵器が国際的に違法なものとなったこと。多くの課題や出来事を受け、今年は非常に重要な大会となっているとしました。日本政府に核兵器禁止条約の早期の批准を求め、核兵器禁止条約に記述のある、あらゆる核被害者の援護と救済を訴えました。

黒い雨、福島原発事故の被害、被爆証言として、広島県原爆被害者団体協議会理事長代行の箕牧智之さんからの被爆体験の話がありました。箕牧さんは、パワーポイントを使いながら当時の広島の様況や、被爆当時に広島へ母とともに父を探しに行ったこと、被爆後の様子などを話されました。戦後の箕牧さんは、貧困と病気との戦いが続きましたが、一方で被爆者運動を積み重ねてきたことが語られました。

大会事務局長の北村智之さんから大会基調の提起があり、命の尊厳を守り、核も戦争もない社会の実現に向けて原水禁運動を進めていくことが訴えられました。その中で日本政府の核の傘からの離脱と核兵器禁止条約への批准を強く求め、核廃絶に向けて運動を進めていくとしました。

集会は最後に、広島県実行委員会の佐古正明さんから閉会の挨拶がありました。コロナ禍にあり、全国からの大会参加は見合わせましたが、核をめぐる情勢は刻一刻変わっていき、それに合わせ運動していくことが訴えられ、閉会となりました。